

## 日本列島に押し寄せた青銅器文化の3つの波 —銅鏡と関連する青銅器生産に関する一考察（第1波）—

かつて日本列島の弥生時代は、北部九州地方を中心とする銅剣銅矛文化圏と近畿地方を中心とする銅鐸文化圏に対置されて考えられてきた。

最近の考古学の成果から北部九州における銅鏡と銅剣・銅矛、出雲地方の銅剣・銅鐸・銅矛、近畿地方の銅鐸・銅矛など、青銅製品の共伴関係から銅剣・銅矛文化圏と銅鐸文化圏が単純に対置される関係では無いことが明らかとなってきた。

最近の研究成果をもとに紀元前300年頃から始まるとされていた弥生時代はさらに数百年遡ることが確実となり、紀元前300年から紀元前200年は弥生時代前期末から中期初頭と考えられるようになってきた。

実は、この紀元前300年から紀元前200年という時代は日本列島に大変大きな影響をもたらした時代でもあった。

中国大陸では、紀元前905年から春秋・戦国時代を経て紀元前246年に第31代君主嬴政（えいせい）が、紀元前221年に楚・燕・韓・趙・魏・斉のうち最後まで残っていた斉を滅ぼし中国初の統一王朝を樹立し始皇帝を名乗った。

なお、始皇帝の姓は嬴（えい）または趙（ちょう）、氏は政（せい）、アニメ『キングダム』でもおなじみである。

この頃、前漢の歴史家司馬遷による『史記』には、斉の方士であった徐福が始皇帝の命を受け不老不死の霊薬を求めて東海の三神山（蓬萊・方丈・瀛州）を目指して大船団を率いて当方へ渡り、『平原廣澤を得て、王として止まり不帰』と記載されている。

日本列島には九州地方をはじめ全国各地に20ヶ所以上の徐福伝説が残されているのも興味深い。斉と言えば秦に最後に滅ぼされた国であり、もし徐福が実在の人物であれば弾圧を恐れた多分野の技術者を含む難民集団、いわばボートピープルとして日本列島にも漂着していたのかもしれない。徐福伝説は朝鮮半島にもあり、許玩鍾の『韓国の「徐福伝説」考』によれば、中国大陸と朝鮮半島、済州島を経て日本列島へ渡った集団のいたことは現実味を帯びている。考古学的には、多鈕細文鏡が日本列島に招来された時期でもあり、この頃から日本列島特に北部九州や佐賀平野に面した吉野ヶ里遺跡では最古級の石製鋳型も発見されている。



この時期の青銅製品の鑄造に用いられた材料も朝鮮半島や中国大陸から持ち込まれたものと考えられており興味深い。

さらに、朝鮮式小銅鐸を祖とする銅鐸の日本列島への招来もこの時期と考えられている。

ちなみに多鈕細文鏡は中国蒙古・東北部を起源とし、朝鮮半島で多く造られた鏡であるが、韓国入室里遺跡や山口県梶尾栗浜遺跡では銅剣・銅矛と共伴し、奈良県名柄遺跡では片面は流水文、もう片面は袈裟袴文の外縁付鈕式銅鐸と共伴して発見されている。

福岡県春日市須玖岡本遺跡に見られる青銅器製品の工房が示すように列島内での青銅器生産が活発化し、銅鐸は北部九州を中心に銅剣・銅矛との共伴関係が顕著となり破鏡または碎鏡されて副葬される様相を示している。

一方、出雲地方の出雲市斐川町神庭の358本もの銅剣が出土した荒神谷遺跡や39個の銅鐸が発見された雲南市加茂町の加茂岩倉遺跡のように銅鏡との共伴関係の無い遺跡の存在から、両遺跡の年代が2世紀頃とされており、漢式鏡以前の銅鏡の分布がこの時期までは北部九州からさほど広がりを見せていないことが分かる。

例外的には鳥取県青谷上寺地遺跡で漢鏡2期の星雲文鏡が発見されているが、銅剣・銅矛との共伴関係を示す出土状況とはなっていない。

兵庫県南あわじ市松帆遺跡出土の銅鐸は7点のうち3組4点の同范関係が判明している。

松帆2号・4号銅鐸と南あわじ市慶の野中の御堂銅鐸、3号銅鐸と島根県加茂岩倉遺跡27号銅鐸、5号銅鐸と島根県荒神谷遺跡6号銅鐸という状況が明らかとなり、それまで島根県荒神谷遺跡出土銅鐸と同県加茂岩倉遺跡銅鐸に同范銅鐸は見つかっていなかったが、松帆銅鐸が両遺跡と同范銅鐸を有することで荒神谷銅鐸と加茂岩倉銅鐸の関係が注目される結果となっている。

ちなみに加茂岩倉銅鐸と荒神谷銅鐸以外にも同范銅鐸の関係があり、南あわじ市教育委員会の南あわじ市松帆銅鐸の同范銅鐸調査成果についての別紙に關係図表が掲示されているので転載させていただいた。



加茂岩倉・荒神谷遺跡出土銅鐸		他地域に所在する同范銅鐸
加茂岩倉銅鐸	1号鐸・26号鐸	
	3号鐸・30号鐸	
	4号鐸・7号鐸・19号鐸・22号鐸	太田黒田銅鐸(和歌山県)
	5号鐸	気比2号銅鐸(兵庫県)
	6号鐸・9号鐸	辰馬419号銅鐸
	11号鐸	川島神後銅鐸(徳島県)
	13号鐸	下板銅鐸(鳥取県)
	14号鐸・33号鐸	
	15号鐸	伝淡路国銅鐸(兵庫県・本興寺蔵)
	16号鐸	岐阜県銅鐸(所在不明)
	17号鐸	上牧銅鐸(奈良県)
	21号鐸	気比4号銅鐸(兵庫県)・伝陶器銅鐸(大阪府)・伝福井銅鐸(明大1号銅鐸)
	24号鐸・38号鐸・39号鐸	
	27号鐸	松帆3号銅鐸(兵庫県)
	31号鐸・32号鐸・34号鐸	上屋敷銅鐸(鳥取県)・桜ヶ丘3号銅鐸(兵庫県)
	36号鐸	念仏塚銅鐸(岡山県)
	荒神谷銅鐸	2号鐸
3号鐸		出土地不明銅鐸2個
6号鐸		松帆5号銅鐸(兵庫県)

### 加茂岩倉銅鐸・荒神谷銅鐸同范関係図

【加茂岩倉遺跡】2002 鳥根県教育委員会・加茂町教育委員会 に加筆  
参考文献『難波分類に基づく銅鐸出土地名表の作成』2007 難波洋三

松帆銅鐸のように古い時期の銅鐸の原材料の鉛が朝鮮半島産で楽浪郡設置以前に持ち込まれたもので、前漢鏡と同時期の銅鐸が中国華北産に替わっていくことから北部九州における漢鏡3期の漢式鏡の急増化と出雲地方以東の銅鐸の同范銅鐸を含む分布域の拡大は拠点を別にするもののほぼ同時期に進行した可能性を指摘したい。

秦は紀元前210年に始皇帝が死去し、紀元前206年に楚の項羽に勝利した劉邦により前（西）漢が中国を統一した。

銅鏡研究では岡村秀典による漢鏡1期から7期まで漢式鏡の編年案が示され、大方の研究者はこれを銅鏡研究の指標としている。日本列島では主に漢鏡2期から3期の時期に大量に銅鏡が北部九州を中心に日本列島に持ち込まれている。

前漢は起源8年外戚の王莽により倒され王莽によって『新』王朝が樹立され、王莽は前漢の経済政策を一変させた。

西暦9年それまでの五朱銭を廃し民間の鑄銭業を廃止させ官営の鑄銭工を新設し新たに大泉と小泉を短期間に大量に発行した。さらに天鳳元年（西暦14年）には貨泉の発行を行い私鑄銭を禁止し鑄造者を厳しく罰した。

前漢時代の五銖銭は120年間で280億枚、年間平均2億3千万枚発行されたが王莽新は西暦23年には滅亡するので王莽期の新貨幣は僅か16年間しか発行されていない。貨泉の場合は西暦14年から実質9年間ほどしか発行されなかったことになる。

王莽新が倒れた後の後（東）漢は再び五朱銖銭の発行を断行する。

にもかかわらず五銖銭よりも多数の貨泉が日本列島から出土している事実は王莽期に日本列島各地と活発な交流があったことを想起させる。

先学の考証によれば、貨泉は幅広い年代の遺跡から出土しているのでこれを根拠に遺跡の年代判定の上限とすることは危ういとする指摘がある。

前漢時代の五銖銭を含め日中両国の中近世まで銭は重量制であり、その貨幣名は意味を成していない。このことからすれば大量生産された銭が鋳つぶされて再利用されない限り時代を越えて使い続けられても不自然さは無い。

また、貨泉に含まれる鉛の同位体比分析からは、前漢鏡や小型仿製鏡などと同様な分布域を示しており、漢鏡7期以降に鋳造された三角縁神獸鏡などとの分析結果は明らかに異なる結果となっている。

したがって、この結果を見る限り貨泉の生産時期はやはり王莽新の時期に絞られる。

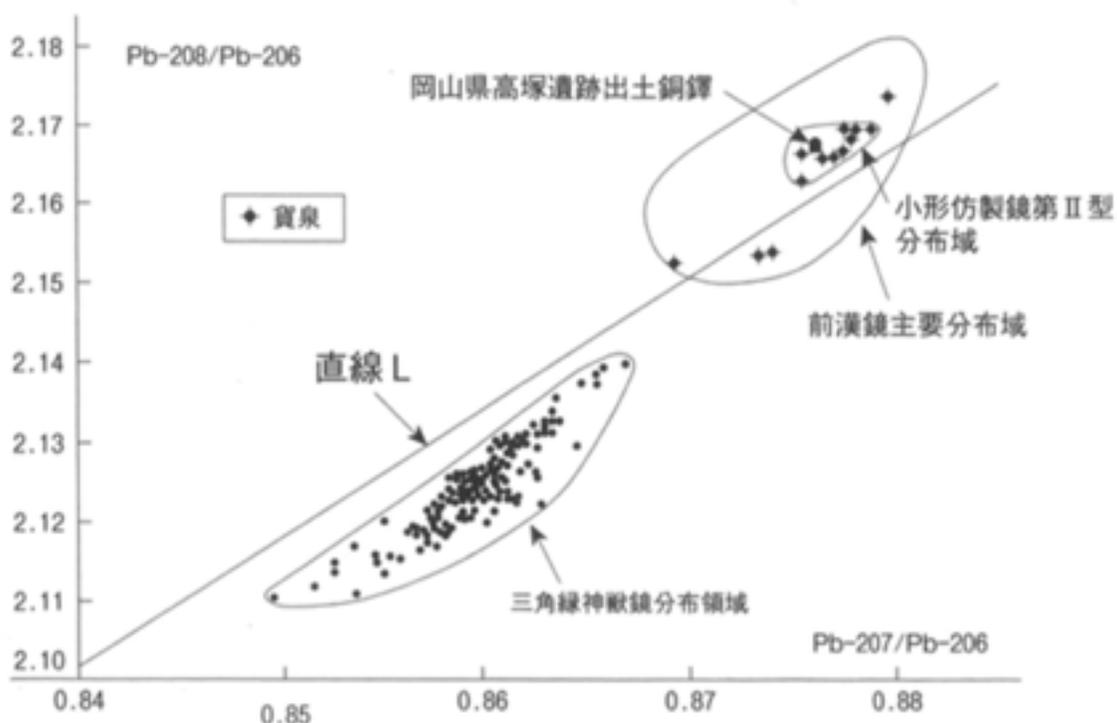


図 「貨泉」の鉛同位体比

鉛同位体比の分析を検証してきた馬淵久男によれば、青銅製品の改鋳とスクラップの再利用について、前漢鏡や五銖銭や泉貨と同じ地域で産出した銅素材を主材料として製品のスクラップを混ぜ合わせて銅鐸を造った可能性について言及している。

すなわち、前漢代に大量に造られた五銖銭の改鑄やインゴット化なども検討課題に上がることとなる。

ヨーロッパでは紀元前16世紀～紀元前12世紀頃にキプロス島を中心とした地中海文明で既に金属インゴットによる交易があったことが沈没船の海中考古学調査によって明らかとなっている。

また、中国でも陝西省長安城遺跡（後漢中期）から長方形銅インゴット（99%、34g）が10個発見されている。

日本では岡山県高塚遺跡から弥生時代後期の棒状銅製品（長さ134cm、重量94.4g）が出土しており、中国から持ち込まれた青銅製品鑄造用のインゴットと考えられている。

馬淵の試算によれば、100g弱という重量の棒状銅製品（100g）1本で、5gほどの銅鏃、30gほどの銅釧、30g～50gほどの小型仿製鏡を複数個体鑄造可能で、200gほどの銅鋤先や500g～2000gほどの銅剣・銅矛・銅戈には数本の棒状製品があれば鑄造可能であると推定している。

多鈕細文鏡や細形銅剣、細形銅矛・細形銅戈・青銅製十字形把頭飾・「久不相見」銘重圈鏡・硬玉製勾玉・硬玉製管玉などを出した福岡県福岡市吉武遺跡群や「日有喜」銘連弧文鏡・「清白」銘重圈文鏡・「精白」銘重圈文鏡・「日有喜」銘連弧文鏡・「清白」銘連弧文鏡など多数の重圈文鏡や連弧文鏡を出土した飯塚市立岩遺跡、多鈕細文鏡・細形銅剣・硬玉製勾玉を出土した宇木汲田遺跡、ガラス璧・ガラス勾玉・金銅四葉座飾金具を出土した三雲南小路遺跡、「精白」銘連弧文鏡・ガラス製管玉・ガラス製小玉を出土した佐賀県二塚山遺跡、「昭明」銘連弧文鏡・素環頭刀子・硬玉製勾玉・硬玉製管玉を出土した佐賀県椛島山遺跡、「尚方作」銘方格規矩四神鏡・方格規矩渦文鏡を出土した佐賀県桜馬場遺跡などがこの時期に該当する。

このことから当該時期はB.C.300年からB.C.100ほどとおきたい。

### —銅鏡と関連する青銅器生産に関する一考察（第2波）—

後漢書東夷伝によれば、西暦57年倭奴国王は後漢の光武帝に朝見の使を送り返礼として金印「漢委奴国王」を授けられた。

「漢委奴国王」の読み方は諸説あって、一般的には「委」を「倭」と読み替え「かんのわのなのこくおう」とされている。

一方「奴」を「と」または「ど」と読み替え「かんいと（ど）こくおう」とする説もあるが、「漢奴国王に委せる」と読めば漢が朝見使の送り主である奴国王をその国の国王として委せると、領土安堵の証の印ということになる。

中期中葉以降は国内でも青銅器生産は活発化し、福岡県春日市須玖岡本遺跡を中心とする須玖遺跡群では北部の坂本地区付近に青銅器生産工房が次々と発見されている。

巴型銅器というスイジガイ（水字貝）がモデルともされる青銅製品の鑄型がある。



巴型銅器は弥生時代から古墳時代にかけて造られた青銅製品で、南西諸島ではスイジガイを魔よけや火よけのため玄関に吊す慣習が有り、護身用の装飾品として受け継がれた可能性も考えられる。

この巴型銅器の石製鋳型が吉野ヶ里遺跡と、須玖遺跡群と至近距離に有る九州大学筑紫キャンパス建設地内で見つっている。

後者の石製鋳型で造ったと考えられる製品が香川県さぬき市の森広遺跡で明治時代に出土していたことが判明し（鋳型は東京国立博物館蔵となっている）、鋳型と製品が確認されたのは初めての例となった。

須玖坂本遺跡では鋳型の発見が相次いでおり、今後各地の青銅製品との照合調査が注目される。この時期の銅鏡には北部九州を中心に内向花文鏡や方格規矩四神鏡などが破鏡や破砕鏡と言う形で副葬品として出土する。福岡県糸島市平原1号墳墓では総数40面の銅鏡が破鏡された状態で発見された。

北部九州にはこの時期吉野ヶ里遺跡や平塚川添遺跡のような大規模な環濠を持つ集落が広がっている。

北部九州を拠点とする青銅器生産が活発化する状況で鋳型製作に必須となる工具について、石製鋳型の加工に必要な鉄器の問題に触れておかなければならない。

弥生時代中期の鉄製品の出土の状況は先学の研究成果からも九州方面に出土数が特出しており、近畿地方では前期から中期中葉段階では大阪平野北部と播磨地方、丹後半島付近に限られる。この傾向は中期後半から後期にかけても出土数の若干の増加はみられるものの変わらない。奈良盆地に限定するとほぼ皆無に近い。



第1図 近畿地方の鉄器出土状況(弥生時代前期～中期中葉)

凡例

- 鉄鏝(有茎錘状三角形式：▲ 無茎三角形式：▼ 柳葉形式：●)、
- 袋状鉄斧：○、板状鉄斧：□、鏃：△、刀子：▽、鉄鑿：◇、
- 鑿・鋸先：×、鉄鏃：+、釣針：\*、鑄造鉄斧：◎、
- 鑄造破片板状鉄斧再生品：⊙、鑄造破片鉄鑿再生品：⊕、
- 鑄造破片鉄鏝再生品：⊗、鑄造破片鉄鏃再生品：⊘、
- 不明品ほか：●



第3図 近畿地方の鉄器出土状況(弥生時代中期後葉～後期前葉)

凡例

- 素環頭鉄刀：●、鉄刀：☆、鉄剣：★、
- 鉄鏝(有茎錘状三角形式：▲ 無茎三角形式：▼ 柳葉形式：●)、
- 袋状鉄斧：○、板状鉄斧：□、鏃：△、刀子：▽、鉄鑿：◇、
- 鑿・鋸先：×、鉄鏃：+、釣針：\*、鑄造鉄斧：◎、
- 鑄造破片板状鉄斧再生品：⊙、鑄造破片鉄鑿再生品：⊕、
- 鑄造破片鉄鏝再生品：⊗、鑄造破片鉄鏃再生品：⊘、
- 不明品ほか：●、
- 鍛冶関連遺跡：※

日本列島に鉄製品が持ち込まれたのは、弥生時代中期初頭に中国の戦国時代の鉄製鑄造農具の搬入に始まり、鑄造鉄製品の破損修理や再利用の過程から発生したと思われる鍛造鉄器が時を経ず出現してきたと言われている。

鉄製工具類は石製鑄型製作には欠かせない道具でもあり、青銅製品生産工房では並行して鉄器の使用が必然であったと考えられることから、近畿地方におけるこの段階で青銅器生産の工房の存在は限定的なものと考えられる。

近畿地方ではこの段階においても埋葬施設に大量の鏡を副葬するほどの慣習は見られない。このことから当該時期はB.C.100年からA.D.300年ほどとしておきたい。

### —銅鏡と関連する青銅器生産に関する一考察（第3波）—

中国大陸や朝鮮半島との交流は北部九州が主であり、弥生時代後期に至ると近畿地方では九州地方と交流を示す資料は見受けられない。

青銅製品や鉄製品の出土状況を見る限り先進地域の九州に対し、後発地域の近畿地方が中国大陸や朝鮮半島の先進技術をどのように受け入れていったのかを検証しなければならない。

前段階で鉄製品の大陸・半島からの搬入地域は丹後半島及び播磨地域であった。

若干の青銅器生産工房は近畿地方にも存在するものの、九州地方に見られたような拠点的な工房は見られない。

一方、丹後半島及び琵琶湖南岸地域から大阪平野北部ならびに播磨地域からは「青龍」・「景初」・「正始」・「赤烏」という中国の年号銘をもつ鏡が完形の状況で出土している。

大阪府北部の茨木市にある紫金山古墳や奈良県天理市の黒塚古墳からは大量の鏡がほぼ完形の状況で副葬されていた。

近畿地方における銅鏡の出土状況の特徴は、特定の鏡を被葬者の棺内特に頭部付近に、三角縁神獣鏡は棺外に完形で大量に副葬されている古墳が存在するという点である。

この傾向からは丹後半島を中心とする多様式の銅鏡搬入ルートが有り、その後点在する青銅器工房で多様式化された三角縁神獣鏡に代表される量産型銅鏡が生産されていった可能性を想起させる。

おそらくその契機となったのは、「青龍」・「景初」・「正始」・「赤烏」という中国の年号銘をもつ鏡と同様に先の丹後半島ルート経由で持ち込まれた盤龍鏡・画像鏡・神獣鏡・内向花文鏡がモデルとなったものと考えられる。

すなわち、従来の北部九州に搬入されるルートとは異なる丹後半島ルートによる新たな青銅器搬入ルートの確立こそが初期大和王権の成立へと大きな影響を与えたと考えられる。

つまり、戦国鏡や漢式鏡を中心とする北部九州の青銅器文化圏とは異なる独自の三角縁神獣鏡を中心とする近畿地方の青銅器文化圏が別に成長していく過程と見ることができる。

また、北部九州ルートが大陸の王朝との交流を主とするのに対し、丹後半島ルートでは中国及び朝鮮半島の市場経由で交易渡来人から入手した可能性も今後の検討課題としたい。

このことから当該時期はA.D.300年前後以降としておきたい。

\*本研究ノートは現在も資料検証中であり今後加筆訂正のあることをお断りしておきます。